

シャルル・ドゴール 民主主義の中のリーダーシップへの苦闘

渡邊啓貴著

慶応義塾大学出版会 3200円

読売新聞 2013年9月1日付 朝刊

評・田所昌幸



たどころ・まさゆき
1956年生まれ。国際政治学者、慶応大教授。著書に『国際政治経済学』など。

過去20年間、日本では14回首相が交代した。これほど指導者を使い捨てにしている体制は世界的に見ても異例だが、上には上があるものでフランスの第3・第4共和政（1870～1958）では100人を超える首相が次々に交代した。その間二つの世界大戦で国土が蹂躪され、

したが、現在のフランスは国連安保理事会の常任理事国として、また核兵器保有国として、世界の権力政治に臆することなく参加している。

こういった現代フランスの姿は、ドゴールというたった一人の指導者の巨大な個性抜きには考えられない。ドイツ軍の電撃作戦の前にフランス軍が瓦解した1940年、無名の一将軍にすぎないドゴールはロンドンに逃れて「自由フランス」政府を組織した。そして4年後のパリ。長身のドゴールが群衆の先頭に立ってシャンゼリゼ通りを凱旋する姿があった。救国の英雄ド

栄光と挫折 絶好の題材

戦後もフランスがアルジェリアの独立問題をめぐって国内は鋭く分裂し、軍事クーデター寸前の状態にまで至った。政治指導が不安定なフランスは長期にわたる凋落を経験

ゴールが、押しも押されもしない指導者なのは明らかだった。だが平和が訪れると、またぞろ始まった政党間の争いに嫌気がさして政界から引退したのは、そのわずか1年あまり後のことである。1958年、民族独立という抗しがたい時代の流れと

たドゴールは、反乱寸前のアルジェリア駐留軍を慰撫しながら、他方で軍を政治権力から遠ざけ巧みに事態を掌握し、フランスの威厳を維持しつつ泥沼化していた紛争から足を洗った。この間何度も暗殺未遂事件があった。文字通り命がけだったのである。

自身が大統領となった第5共和政下でドゴールが追求したのは「偉大なフランス」だった。米ソ冷戦下でもアメリカにしばしば盾をつき執拗に独自の外交路線を追求する姿に、アメリカへの依存に反発する日本人にも共感があるかもしれない。だがフランスが、かつてのように「偉大」ではないことは動かしがたい現実であり、自立を演出しつつも周到に大西洋同盟の有効性の維持に腐心したのが実態だった。それによって60年代にはフランスが安定と繁栄を享受しただけではなく、人々が祖国に自信を取り戻すことができたのは、見事な功績と云うしかない。だが威信の追求はそれなりの負担を国民に強いるものだった。そして危機を乗り越えたフランスで、人々が「偉大なフランス」のための負担を受け入れようとしな

力にしばしば盾をつき執拗に独自の外交路線を追求する姿に、アメリカへの依存に反発する日本人にも共感があるかもしれない。だがフランスが、かつてのように「偉大」ではないことは動かしがたい現実であり、自立を演出しつつも周到に大西洋同盟の有効性の維持に腐心したのが実態だった。それによって60年代にはフランスが安定と繁栄を享受しただけではなく、人々が祖国に自信を取り戻すことができたのは、見事な功績と云うしかない。だが威信の追求はそれなりの負担を国民に強いるものだった。そして危機を乗り越えたフランスで、人々が「偉大なフランス」のための負担を受け入れようとしな

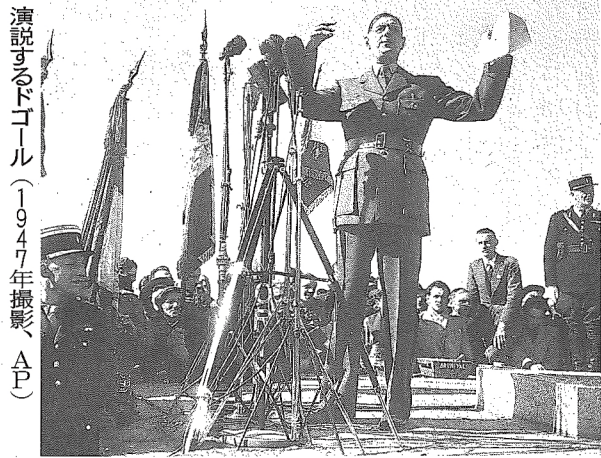
かたことは、68年の学生運動に端を発する社会危機が象徴していた。翌年あっさりと権力を手放し自宅のある寒村に退いた時、二つの危機から祖国を救った偉大な指導者の胸には、自国民への幻滅があったのかもしれない。

負担を伴う厳しい選択を避け、人気取りと利害調整に消耗する現代日本の政治指導のあり方に対する「こんなことをやっている場合か」という思いが、著者の問題意識にあることは痛いほどよくわかる。ドゴールの栄光と挫折の物語は、大衆民主主義における政治指導一般を考える上で、またとない題材である。

日本における現代フランス研究の第一人者である著者が、最新の研究を織り込んで日本人向けに上梓したドゴール論だけに、細かな誤りや舌足らずな記述が散見されたのは残念だが、このテーマで最初に読まれるべき一冊である。

この政治技術の天才の栄光と追放の物語を読み終えて評者の胸に残ったのは、一つは芸術作品を鑑賞した後のような充実した余韻。もう一つは、戦争や内乱の恐怖や悲惨ですら、信じるものへの献身の機会に昇華させた偉大な人物へのいささかの羨望。

皆さん。悪いことは言いませんから、ともかく一読を。



演説するドゴール（1947年撮影、AP）

「フランスのアルジェリア」を叫ぶ勢力の間で、第4共和政下の政党政治は統治能力を完全に喪失した。国内諸勢力の矛盾した期待を受けて政権に復帰し

◇わたなべ・ひろたか 1954年生まれ。日仏政治学会理事長などを歴任し、東京外大国際関係研究所長。著書に『ミッドラン時代のフランス』など。

